

並もとくと不承合段、聞番不念に候。萬治三年御用に付、今枝民部金澤へ罷越、青山織部・九里覺右衛門等御用相勤候節、御老中への御書に前々の格を以て、片御名字に相調上申候。其節御膳所の下に有之候御既に被成御座、奥村湍兵衛か持參仕申候に付、か様にては有之間敷儀に候。もろ御苗名に相調可然由被仰出候處、御家柄の儀に御座候へば、其儘片御苗字に被遊可宜旨、織部等達て申上候へども、昔はいか様にても、今程は時にあひ不申儀に候間、是非もろ御名字に調申様にと御意にて、それより今以て其通りに罷成候。是は又織部等考不宜候。か様にさへ申候所、今は又格別の儀に候。薩摩守殿・陸奥守殿などには、家柄輕々敷成不申様に仕成申様に候。御老中への片御苗字の儀などは、今程誰も覺申間敷候。萬一内藏藤井・織部承及可有之や、御十二歳にて正四位上少將御拜任、其翌年か紅葉山御成之供奉御勤被成候。上方より參候御裝束は、常の通にて有之候を、微妙公御覽被成、か様の物召させ可申儀にて無之候。微妙公禁色の御裝束、急ぎ直させ召せ候様にと御意にて、水谷金右衛門親吉右衛門俄に直し候て御着用被遊候。因此それ

より參議御昇進以前も、無御遠慮禁色被爲召候。然共御老中より御不審も終に無之候。此儀尙以て何も覺申間敷候間、御近習の者迄被仰聞候。  
一、聖善夢得の句  
我聖善貞享甲子の年、猶外家官井氏に在て余も從之、年甫て十歳也。或時聖善夢得之句あり云。  
本のふる巢に歸る鶯  
數日の後又夢に  
ひかりさす御世に盃かたぶけて  
外祖官井丈甚賞之、北郊の廟へ告て百韻を續成しぬ。今に其懷紙あり。是の年伯孜君年甫て十三在東都、十二月本知八百石を賜ひ、其二百名を賜る。  
一、中村正白知命の賀章  
中村正白號白峯元文五年春二月其子佳安、壽五十賀。  
賀白峯君五十之壽 壺峰 深山 良  
周代天官今侍醫。燕臺藩邸特相知。百年橘井依郎置。千里桃源接上池。恩賜自言稽古力。壽杯誰願尙書期。一從藥籠藏材用。五十仙風更起詩。

賀白峯中醫伯五十壽

意軒 不破 元澄

壽筵美酒送香頻。幾唱南山無限春。金杏成林藏猛虎。碧桃結實對真人。術從顛顛經中得。學向陰陽書裏新。回首蓬瀛路相接。群仙歌舞祝佳辰。

賀大鑿玉江先生知命華誕

中西 尙賢

杏林此日逢初度。花撲蘭樽壽酒香。詩賦高才宗李杜。刀圭鴻術逐盧倉。蝶車花外溫風轉。鶯曲樹頭淑景長。採藥未煩三島去。地仙元自有蘇方。

其二

洛社耆英司馬少。休誇五十始稱衰。慶筵開處乾坤潤。春酒醺人日月遲。紅甲紺芽收佐使。紫丸赤符起嬰兒。最憐子侄獻酬裏。艶々杏花映壽卮。

白峯老人壽詞

倚蘭主人 高辻符從長

白山嶺峯幾千年。雪色霞光映壽筵。自是脩眞兩家事。無勞海外問神仙。

希通中醫伯五十壽詩

近江宇鼎 宇鼎三年名册字 士新近江人

彩毫將彩服。稱壽向開筵。北地迴春雲。上池成酒泉。共知醫國手。且見杖家年。却老元能事。南山更幾篇。

賀白峯中君知命覽揆

賀蘭山 加藤庄助

原知仙家日月長。懸弧况復近青陽。休將雪色添玄鬢。更值梅花照壽觴。獻賦一朝恩遇重。學醫三世姓名香。羨君子弟皆龍鳳。金匱永傳肘後方。

君嘗奉世子之命賦詩上焉。故用長楊賦事。

今茲白峯君。年迫知命。令胤佳安君遍請親友求祝嘏之詞。余亦與焉。余蒙白峯君之眷厚舊矣。無令胤之言不宜默然。况有其需乎。迺賦壽詩一章。以擬天保之歌。

大地昌言行甫

近報關門紫氣來。承恩公讞賦詩回。九還且向爐中伏。三世書從肘後開。北海賓筵當畫滿。南山壽色入歌催。君家子弟如蘭玉。行見綵衣學老萊。

君近自東都歸家。又其在藩邸屢侍世子預遊宴。故詩中用東來紫氣及公讞事。

賀中白峰醫伯五十初度

松溪大庭探元貞德基

南極星輝何處新。燕城共指鍊丹人。紅桃花發三千歲。金杏陰深五十春。堂上酒斟仙液美。郢中歌和鳳簫頻。能文那有相如渴。道骨羨君比大椿。